

第20回 令和3年度
八戸市遺跡調査報告会



八戸市埋蔵文化財センター
是川縄文館

〒031-0023 青森県八戸市是川字横山1

TEL 0178-38-9511 FAX 0178-96-5392

<https://www.isokawa-jomon.jp/>

◆会場：是川縄文館 1階 特別展示室

◆主催：八戸市埋蔵文化財センター（是川館）

令和3年度発掘調査遺跡一覧

No	遺跡名	時代/種類	所在地	調査原因	調査面積 (㎡)	調査期間	
試掘調査	1	塩入遺跡①	縄文・平安/散布地	大館	個人住宅建築	8	令和3年4月5日
	2	塩入遺跡②	縄文・平安/散布地	大館	個人住宅建築	9	令和3年4月6日
	3	盲堤沢(2)遺跡	縄文/散布地	白山台	寺院建築	11	令和3年4月8日
	4	熊野堂遺跡①	縄文・奈良・平安/集落跡	根城	建売住宅建築	14	令和3年4月8日
	5	田面木遺跡①	縄文・弥生・奈良・平安/集落跡	田面木	個人住宅建築	9	令和3年4月9日
	6	松ヶ崎遺跡①(21地点)	縄文・奈良・平安/集落跡・貝塚	大館	太陽光発電施設設置	24	令和3年4月12～13日
	7	新井田古館遺跡①	縄文・奈良・平安・中世・近世/集落跡・城館跡	大館	個人住宅建築	10	令和3年4月15日
	8	市子林遺跡①	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世/集落跡	大館	個人住宅建築	8	令和3年4月16日
	9	丹後谷地(3)遺跡①	縄文・平安/集落跡	白山台	送電用電気工作物建設工事	12	令和3年5月6～7日
	10	雷遺跡①(13地点)	縄文・奈良・平安・近世/散布地・集落跡	吹上	宅地造成	98	令和3年4月19日～5月11日
	11	田面木遺跡②(58地点)	縄文・弥生・奈良・平安/集落跡	田面木	個人住宅建築	23	令和3年5月13日
	12	前川目遺跡①	縄文/散布地	南浜	太陽光発電施設設置	62	令和3年5月17～20日
	13	八戸北第2工業団地予定地	縄文・奈良・平安/集落跡・散布地	上長	八戸北インター第2工業団地造成	3,018	令和3年3月2日～5月31日
	14	田面木遺跡③(59地点)	縄文・弥生・奈良・平安/集落跡	田面木	個人住宅建築	21	令和3年5月24～25日
	15	八戸城跡①	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・近世・近代/城館跡	三八城	個人住宅建築	12	令和3年6月23～25日
	16	丹内遺跡①(3地点)	縄文・奈良・平安/集落跡	大館	太陽光発電施設設置	188	令和3年6月18～21日
	17	市子林遺跡②	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世/集落跡	大館	個人住宅建築	18	令和3年7月5日
	18	館平遺跡①	縄文・平安・中世・近世/集落跡・城館跡	大館	個人住宅建築	4	令和3年8月25日
	19	法霊林遺跡①(9地点)	縄文・奈良・平安/集落跡	田面木	個人住宅建築	11	令和3年8月19日
	20	沢目遺跡①	縄文/散布地	白銀	長屋住宅建築	7	令和3年9月8日
	21	沢里山遺跡①	縄文/集落跡	長者	賃貸住宅建築	59	令和3年9月14～24日
確認調査	22	一王寺遺跡	縄文・弥生・奈良・平安・近世/集落跡	是川	史跡内容確認	564	令和3年6月1日～9月8日
	23	新田城跡(館平遺跡)	縄文・平安・中世・近世/集落跡・城館跡	大館	保存目的の確認	261	令和3年7月1日～8月31日
本発掘調査	24	八戸城跡(48地点)	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・近世・近代/城館跡	三八城	祭具庫建築	115	令和3年4月5～30日
	25	八戸城跡(52地点)	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・近世・近代/城館跡	三八城	3・5・1沼館三日町線道路改築工事	47	令和3年6月1日～30日
	26	八戸城跡(53地点)	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・近世・近代/城館跡	三八城	3・5・1沼館三日町線道路改築工事	170	令和3年10月1日～11月30日(予定)
	27	田面木遺跡(59地点)	縄文・弥生・奈良・平安/集落跡	田面木	個人住宅建築	26	令和3年6月11日～18日
	28	法霊林遺跡(9地点)	縄文・奈良・平安/集落跡	田面木	個人住宅建築	12	令和3年9月1日～9日
	29	石橋遺跡(12地点)	平安/集落跡	大館	長芋作付け	1,300	令和3年6月1日～11月12日(予定)
	30	松ヶ崎遺跡(11地点)	縄文・奈良・平安/集落跡・貝塚	大館	長芋作付け	1,800	令和3年9月1日～11月30日(予定)
	31	笹ノ沢(2)遺跡	縄文/集落跡	上長	八戸北インター第2工業団地造成	1,020	令和3年6月1日～6月30日
	32	笹ノ沢(6)遺跡	縄文・奈良・平安/集落跡	上長	八戸北インター第2工業団地造成	900	令和3年6月24日～7月30日
	33	平(2)遺跡(1地点)	縄文/散布地	下長	八戸北インター第2工業団地造成	1,674	令和3年7月20日～10月29日
	34	笹ノ沢(6)遺跡(2地点)	縄文・奈良・平安/集落跡	上長	八戸北インター第2工業団地造成	2,700	令和3年10月27日～11月30日(予定)

報告遺跡

※10月末日現在

令和3年度発掘調査遺跡位置図





たいら 平 (2) 遺跡

1. 遺跡の概要

平 (2) 遺跡は、八戸市中心部から北西約 5.5 km の、^{あさみず がわ ごのへ がわ}浅水川と五戸川に挟まれた標高 70m 前後の^{きゅうりょう}丘陵に立地しています。八戸北インター第 2 工業団地の開発に先立ち、平成 30 (2018) から令和 3 (2021) 年まで埋蔵文化財の有無を確認するための調査を予定地内で行い、新たに 2 ヶ所の遺跡を発見することができました。そのひとつが、この平 (2) 遺跡です。

2. 検出遺構

今回の調査では、縄文時代の^{たてあな}竪穴建物跡 6 棟、^{どこう}土坑 10 基、^{みぞあと}溝跡 3 条、^{みぞじょうどこう}溝状土坑 25 基などを確認しました。

(1) 竪穴建物跡 (早期後葉～前期前葉)

遺跡の東側でみつけられました。建物の形は直径約 3～5m の円または楕円形で、深さは約 10～50cm です。屋根を支える柱を立てた穴は、1 棟 (SI4 竪穴建物跡) のみみつけられました。このほかの竪穴建物跡では、^{かべぎわ}壁際に斜めに掘られた穴がみつかっています。斜めに立てた柱を中心に集め、屋根をのせたと考えられます。また、建物跡内に火を^た焚いた^{こんせき}痕跡が確認されなかったことから、野外で火を焚いて^{にた}煮炊きしていたと考えられます。

(2) 縄文時代の落とし穴を確認

遺跡全体で計 37 基の土坑が確認されました。

このうち、垂直な掘り込みで底が平らな土坑はモノの出し入れが容易なため、貯蔵穴と推定されます。

そのほかのものは、狩猟用の落とし穴であった可能性があります。底に穴があるものは、穴に逆茂木を立てることで動物が落下した際に足が底に着かないようにしたもので、また細長い溝状のものは深くなるにつれて狭くなるように掘られ、落下した際に足をとられるようにしたと推定されるからです。これらは、出土遺物がないことから時期が明確ではありませんが、縄文時代早期後葉から前期前葉の竪穴建物に壊されたものが 1 基あることから、これは縄文時代前期以前につくられたものと考えられます。

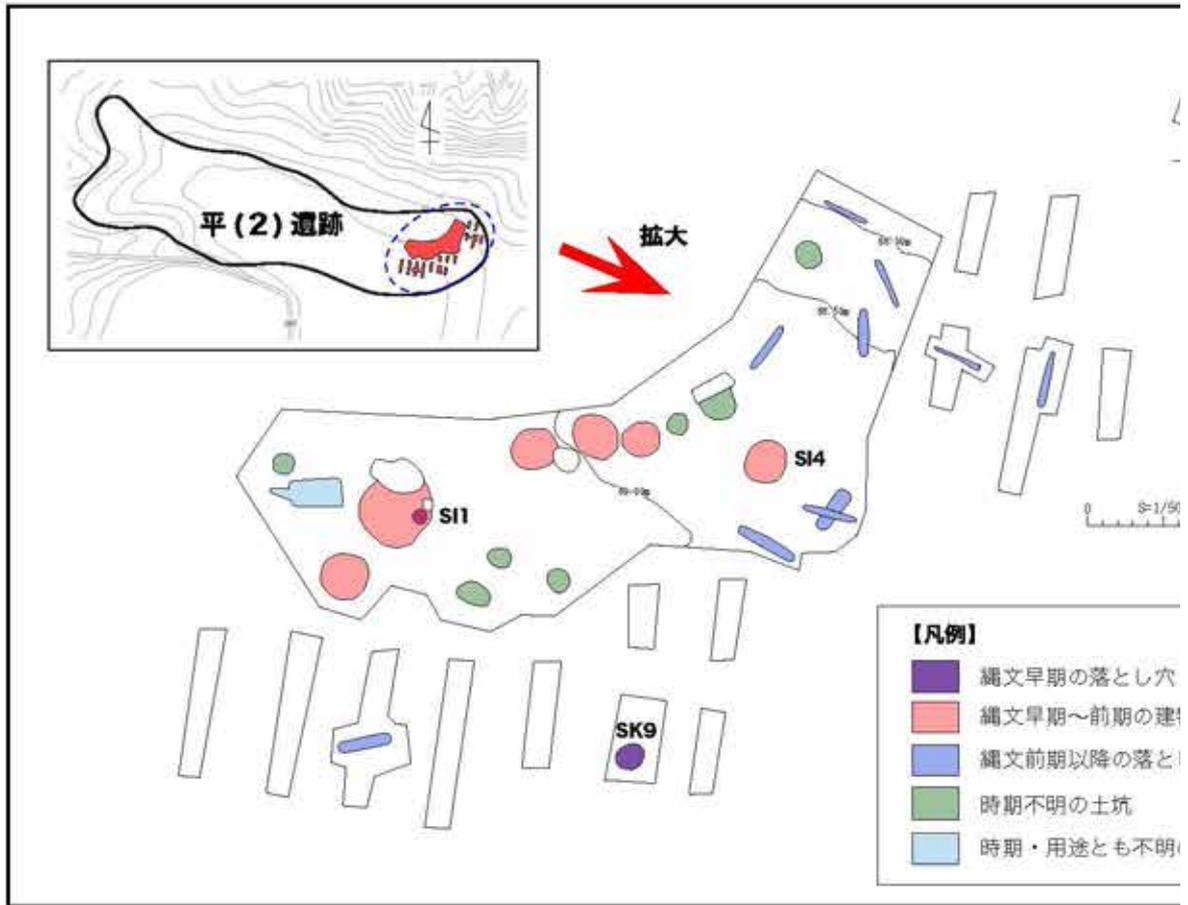
3. 出土遺物

今回の調査では、縄文土器 (早期・前期) を中心に、石器 (石^{せきぞく}鏟・石^{いしきじ}匙・石^{いしべら}筥・磨^{ませい}製石^{せきふ}斧・^{たたきいし}敲石)、石製品などが出土しました。

縄文土器には、2 種類の異なる太さや^よ撚り^{かた}方の縄で文様がつけられていたり、土器の裏にも縄文がつけられていたり、丸底になっているなど、縄文時代早期後葉から前期前葉にかけてのこの地域の土器の特徴がみられます。石器は、^{しゅりょう}狩猟用の矢^{ばっさい}じりや伐^{いしおの}採用の石斧などがみつかるとともに、^{せきすい}石^{ぎょうろう}錘などの漁^{ぎょうろう}労に使用する道具はみつけられませんでした。

4. まとめ

調査の結果、縄文時代早期後葉から前期前葉の集落跡がみつけられました。また、落とし穴がみつけられ、狩り場として使われていた時期があることもわかりました。さらに、遺構には時期差があり、遺跡は①狩り場 (縄文時代早期後葉以前) →②集落 (縄文時代早期後葉から前期前葉) →③狩り場 (縄文時代前期以降) と変遷することが考えられます。 (上ノ山 拓己)



平(2)遺跡 遺構配置図(部分)



平(2)遺跡遠景



縄文時代早期～前期の集落跡





いちおうじ 一王寺 遺跡

1. 遺跡の概要

本遺跡は、中居遺跡・堀田遺跡を含む「史跡是川石器時代遺跡」の一つで、面積は約32万6千㎡と、3遺跡の中で最も広い遺跡です。新井田川左岸に面する、標高20～40mの緩やかな傾斜地から標高100m前後の丘陵に立地しています。

これまでの調査により、縄文時代前期後半～中期中葉（約5,900～4,300年前）の円筒土器文化期を中心とした大きな集落（ムラ）が遺跡南側に広がることがわかっています。緩斜面の標高の低い場所には堅穴建物跡などが分布し、南側の沢に至る斜面には大規模な捨て場が、西側の丘陵部の周辺には集石遺構や土坑墓などが確認されています。

八戸市教育委員会では、平成6年から断続的に本遺跡の調査を行ってきましたが、遺跡の詳しい内容はわかりません。今後の史跡としての整備ため、令和元年度から令和6（2024）年度までの6か年で、史跡指定地を中心に内容確認のための発掘調査を行っています。今年度は、西側の丘陵部に近い緩斜面地の調査を行いました。

2. 検出遺構

今年度の調査では、縄文時代の堅穴建物跡14棟、掘立柱建物跡2棟、土坑25基（うち土坑墓5基）、溝状土坑1基、捨て場などを確認しました。

（1）縄文時代前期～中期の捨て場を確認

調査区北東側では、縄文時代前期後葉～中期中葉までの遺物が集中する捨て場がみつかりました（231・233・234 トレンチなど）。捨て場では、土器や炭化物、焼土などを含む土が帯状に重なる層が確認されました。捨て場のみつかった場所は、旧地形が北に向かって急激に落ち窪んでいく旧地形であることや、土器などを含む土も旧地形に沿うように北に向かって傾斜して堆積していることから、南から北へ向かって土器などを廃棄していたと考えられます。

（2）縄文時代中期～後期の遺構を確認

調査区北東から南東側では縄文時代中期中葉から後葉の堅穴建物跡、西から南西側では後期初頭から前葉の堅穴建物跡などがみつかりました。

また、223 トレンチ南側では、後期初頭から前葉ごろの捨て場がみつかりました。この捨て場の下からは、墓とみられる長楕円形の土坑が確認されました。このような土坑は、西側の丘陵部に近い、南から西の範囲でまとまってみつかりました。

3. 出土遺物

今回の調査では、縄文土器（前期・中期・後期）を中心に、土製品（土偶・土面・キノコ形土製品・円盤状土製品など）、石器（石鏃・石匙・石錘・石筥・石斧・磨石・敲石など）、石製品（石刀・石玉・玦状耳飾・円盤状石製品など）などが出土しました。また、土師器もわずかに確認されています。

4. まとめ

これまでの調査成果から、遺跡南側での時期ごとの土地利用の変遷が少しずつわかってきました。

緩やかな斜面は居住域として、縄文時代前期から後期初頭～前葉にかけて、長期間にわたり利用されたと考えられます。また、その居住域を挟む南北に大きく下る傾斜地は主に縄文時代前期後葉から後期初頭まで捨て場として利用された可能性があることがわかりました。

（宇庭 瑞穂）



《凡例》

- 縄文時代前期
- 縄文時代中期
- 縄文時代後期
- 時期不明
- 古代

※図中のドットは、
遺構に重複した捨て場範囲を示す





いしばし 石橋 遺跡

1. 遺跡の概要

本遺跡は八戸市中心部から南東に約4km、新井田川右岸の標高47～72mの丘陵上に立地している平安時代を中心とした遺跡です。今回調査を行った第12地点は、遺跡南端の標高約66～70m、北から南へなだらかに下降する斜面に位置しています。遺跡の南側には、同時代の坂中遺跡、市子林遺跡が広がっています。これまでの調査で、縄文時代、平安時代、近世の遺構・遺物がみつかっています。

2. 検出遺構

今年度の調査では、平安時代の竪穴建物跡16棟、掘立柱建物跡4棟、土坑4基、溝跡2条、縄文時代の溝状土坑5基、近世以降の掘立柱建物跡1棟、土坑墓2基がみつかりました。

竪穴建物跡は、1辺が3～10mと大きさは様々です。カマドが作られたものとそうでないもの、大きな土坑が複数つくられていたもの、焼失して炭化材が残るものなど付随する施設や検出状況も様々です。特に、SI30竪穴建物跡は、一辺が約10mと八戸において最大級と考えられます。北西側にカマドをもち、長さ3mの煙道がつくられていました。みつかった柱の穴9個のうち、屋根を支えた主要な柱は4個で、深さ1m前後のしっかりとしたものです。さらに、床面の下から古いカマドの跡と柱穴が検出されたことから、SI30は建物を拡張しており、新旧2時期があることがわかりました。

平安時代の掘立柱建物跡は、3間×2間2棟、2間以上×2間以上1棟、1辺3間以上1棟、近世以降とみられるものでは、1間以上×4間1棟がみつかっています。

3. 出土遺物

今回の調査では、平安時代の土師器、須恵器、製塩土器、石器、石製品、鉄製品、青銅製品、動物遺存体、炭化した木製椀、繊維製品、穀類、近世以降の陶磁器、銭貨、人骨がみつかりました。中でも、須恵器と鉄製品は豊富に出土しています。土師器には、煮炊き用の甕と食膳具とされる坏があります。須恵器には甕と壺があり、ほとんどが竪穴建物跡に廃棄された状態でみつかっています。石器は砥石や擦石、敲石があります。鉄製品には、鉄鏃（狩猟具または武器）、銚先、釣り針（漁労具）、鉄斧、手斧（伐採・加工具）、鎌、手鎌（農耕具）、紡錘車（糸を紡ぐ道具）、縫い針（裁縫道具）、刀子（小刀）などがあります。また、馬具の一部とみられる鉸具や鐙の吊り金具、編んだ鎖（兵庫鎖）も複数みつかりました。

さらに、動物の骨や貝、炭化したコメなどの穀類がたくさんみつかり、古代の食生活を知る貴重な資料となりました。

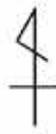
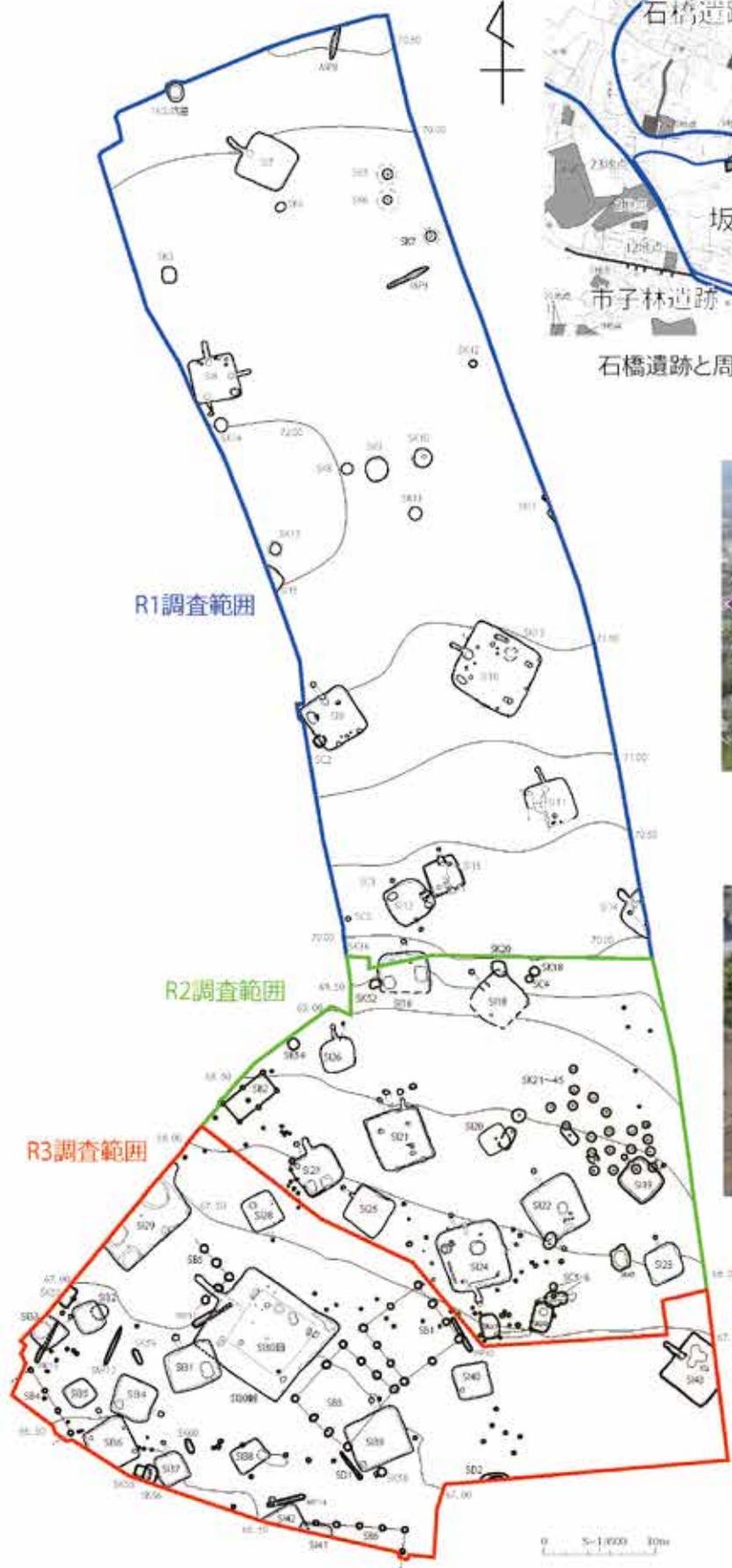
4. まとめ

石橋遺跡第12地点におけるこれまでの3年間の調査では、平安時代の竪穴建物跡37棟、掘立柱建物跡5棟、土坑7基、焼土遺構4基、溝跡2条、縄文時代の土坑6基、溝状土坑7基、近世遺構の掘立柱建物跡1棟、土坑22基、土坑墓4基がみつかりました。

平安時代の集落は、出土した遺物や、竪穴建物跡に堆積した火山灰、炭化材の分析から、10世紀中心だと考えられます。遺跡がある丘陵部南側の斜面を下るにつれ、遺構の分布密度が高くなっており、大型の竪穴建物跡（SI30）や掘立柱建物跡（SB1、3）などを中心として集落が構成されていたと考えられます。また、他地域で焼かれる須恵器が多くみつかったことから、この集落が拠点的な場所であったと考えられます。

（山田 貴博）

石橋遺跡第12地点遺構配置図



石橋遺跡と周辺の遺跡
■ 第12地
■ 過去の



空から見た石橋遺跡(南)



遺構が見つかるようす(北)

- SI=竪穴建物跡
- SB=掘立柱建物跡
- SK=土坑
- SC=焼土遺構
- SD=溝跡
- MP=溝状土坑

0 5 10000 20m



にいだじょう 新田城 跡

1. 遺跡の概要

新田城跡は八戸市中心街から南東に約 3.5km、新井田川と松館川の合流地点に面する段丘に立地します。段丘の西端部が急崖となっており、その周辺が館平遺跡として登録され、中でも最も高く平らな標高約 34～38m の場所を中心につくられたのが新田城跡とされています。

文献資料によると、根城南部（八戸）氏の一族である新田氏は、室町時代以降に八戸の地に城を構えたとされています。その後戦国時代を経て、安土桃山時代の 1580（天正 20）年に根城とともに新田城は破却されます。新田氏も江戸時代初めの 1627（寛永 4）年に根城南部氏の遠野転封に従い、八戸を離れています。

この時期の「お城」は曲輪とよばれる空間の組み合わせで構成されており、新田城跡は当時の曲輪が一部残されていると考えられています。それは、現新田八幡宮の境内が含まれる東西最大約 200m、南北最大約 150m の広さをもつ平場（主曲輪）と、現新井田小学校の平場から南と東に下っていく斜面や段のある曲輪（外館）からなるといわれ、現在は主曲輪と外館を区切る堀は埋め立てられ、現新田小学校の西に面する道路および宅地となっています。

2. 検出遺構

現在、主曲輪はほぼ平坦で緩やかに北へ下っていますが、発掘調査により南・東側を中心に本来の地形が大きく削られて、北・西側は盛土されていることを確認し、大規模な土木工事が行われていることが判明しました。

この土木工事により造られた平場には、掘立柱建物跡が集中する範囲があり、そこに城主の建物が置かれた城の中心地である可能性が高いとみられます。また、検出数は少ないものの、主曲輪の周縁部には工房用の竪穴建物跡や鍛冶炉、倉庫用の掘立柱建物跡などがみつかりました。このような遺構の分布は、根城跡や新井田古館遺跡などの根城南部氏に関連する遺跡の特徴にも類似しています。

また、主曲輪を取り囲む堀跡や土塁（土で築いた土手）、そして西・南側では切土されて一段低く細長い平場に造成された帯曲輪（腰曲輪）といった遺構群は、城の守りを固めるための施設であり、当時の新田城が強い防御性を備えていたことがわかります。

3. 出土遺物

戦国時代から安土桃山時代まで（15 世紀～16 世紀）の中国産輸入陶磁器（青磁、白磁、染付）、国産陶磁器（瀬戸・美濃、肥前、信楽、越前など）、また世相を思わせる革製と鉄製の鎧の一部（小札）が出土しています。加えて、鍛冶や鑄造を行った痕跡となる羽口（炉へ続く送風口）や坩堝（熱で溶けた金属を受けるうつわ）といったものから、城内での活動の様子が垣間見えます。

4. まとめ

新田城跡では、大規模な土木工事により曲輪の造成が行われており、中でも堀・土塁・帯曲輪といった施設により守りが強い城造りをしていたことがわかりました。これらは乱世の時代が極まる 16 世紀中葉から後葉にかけて、全国的にみられる特徴ですが、八戸においては根城南部氏一族の中で新田氏が一介の家臣を超えた、特別な存在となっていたことを示しています。（苧坪 祐樹）



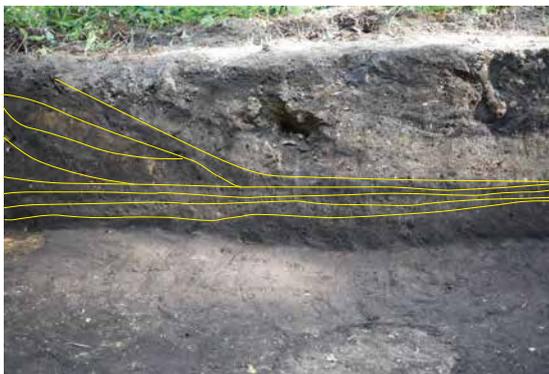
新田城跡模式縄張図



帯曲輪 (切土)



土塁 (盛土)



主曲輪：平場 (盛土)



工房用の縦穴建物跡



《土面》
一王寺遺跡出土